

令和7年度 はだの歴史博物館 企画展

直良信夫－秦野に眠るナチュラリスト

会期：令和7年5月24日（土）から7月27日（日）



直良信夫（1902－1985）



はじめに

「直良信夫」の名は、「明石原人」の発見者で、1980 年ごろまでは歴史の教科書にも取り上げられていたほどですが、現在では原人骨ではないことが通説となり、その名は忘れ去られようとしています。しかし、その業績は「明石原人」の発見だけではありません。考古学、生物学、生態学など、その研究対象は幅広く、随筆なども含め、生涯に 60 冊以上の著書を刊行しています。

直良は昭和 30 年代から秦野の地をしばしば訪れ、その時々記録を報告書や随筆の形でまとめています。これらは秦野市における文化財調査研究の先駆的業績に位置づけられています。また、その墓所は市内今泉の太岳院にあり、市にとってもゆかりの深い人物といえるでしょう。

没後 40 年の節目にあらためて直良と秦野のかかわりをご紹介します。

直良信夫の生涯

直良信夫は旧姓を村本といい、明治35(1902)年1月に大分県北海部郡臼杵(うすき)町大字二王座に生まれました。

大正3(1914)年、尋常小学校高等科1年を終了すると、伯母の養子となり上京、王子尋常小学校高等科2年に編入しますが高等科2年終了と同時に臼杵に帰ってしまいます。その後、2年ほど独学する日々を送るうち、女学校の教師であった直良音(おと)と知り合います。

大正6(1917)年、再び上京すると早稲田工手学校夜間部や倉鉄道学校で学び、大正9(1920)年に中目黒にあった農商務省所管の臨時窒素研究所に就職します。



臨時窒素研究所内部の様子

休暇を利用して目黒周辺の貝塚や遺跡の踏査・発掘を行っていた村本は、採集した土器片を乳鉢ですりつぶし、化学的に分析する研究に着手しました。

しかし、体調が悪化し結核と診断された村本は研究所を辞め、郷里で静養すべく、大正12(1923)年8月31日、夜汽車で東京を離れました。

車中で村本は、姫路の女学校に転勤していた直良音を訪ねてみようと思立

ちます。音に再会すると、姫路での静養を勧められました。翌年には村本が入籍する形で音と結婚、直良姓を名乗ることとなります。翌年には療養に適した明石に移住し、療養の傍ら考古学研究に没頭する生活が始まりました。

昭和6(1931)年4月18日、直良は兵庫県明石の西八木海岸で、崩れた崖の土の中から化石化した人間の腰骨を発見します。この人骨化石を含んでいた土は、ナウマン象の化石などを含む層の土と同じものであり、ナウマン象と同じ時代に生きていた旧石器時代人類の骨ということになります。

しかし当時、考古学者は古式の縄紋土器を捜している段階で、日本に旧石器時代人類が生息していたという話にはわかには受入れられませんでした。

直良は人骨化石を鑑定してもらうため、東京大学人類学教室の松村瞭に送りますが、やがて「適当な比較材料がないためなんともいえない」という意味の手紙とともに人骨化石が返送されてきました。この時、松村は人骨化石を重要視してか、精巧な石膏型を作成していました。



明石西八木海岸で発見された人骨化石

直良は昭和 7(1932)年 11 月に三たび上京すると、早稲田大学の徳永重康を訪ね、私設助手として獣骨化石の整理作業を行なうことを依頼されます。こうして直良は、古生物学や動物学への興味と知識を深め、昭和 10 年代には、遺跡出土の自然遺物の同定、分析者としての立場を確立します。

徳永は直良を無給で従事させることに気を遣い、早稲田大学理工学部採鉱冶金学教室の図書係の職を紹介しました。昭和 15(1940)年に徳永が逝去すると、一旦は辞職しようとするのですが、大学側から引き止められ、研究室での仕事を続けました。そして昭和 19(1944)年、理工学部採鉱冶金学教室で古生物学を教えることとなり、翌年 4 月には早稲田大学講師の肩書きで古生物学と地理学を教えることになります。

昭和 20(1945)年 5 月 25 日、東京大空襲で直良の自宅が炎上、人骨化石をはじめ、書き溜めた原稿や膨大な資料は灰燼に帰してしまいました。

昭和 22(1947)年、東京大学に残されていた人骨化石の石膏型を検討した長谷部言人(ことんど)が、数十万年前の北京原人級のものと評価し、「ニッポナントロプス・アカシエンシス」と命名すると、直良の発見した化石人骨は「明石原人」の名で広く知られるようになりました。

直良は、この後も「葛生原人」や「江古田植物化石層中の野性稻」などの発見を行ない、昭和 32(1957)年 7 月には『日本古代農業発達史』により早稲田大学から文学博士の学位を受け、昭和 35(1960)年 4 月には理工学部教授に就

任します。

昭和 40(1965)年 5 月、戦後長く病気がちであった音夫人が亡くなると、翌年 12 月音の従姉妹である春江と再婚します。昭和 47(1972)年には早稲田大学を定年退職しますが、東京の喧騒から脱出することを決意し、春江の故郷の出雲に転居します。

昭和 57(1982)年、「明石原人」をめぐる論争が再熱し、昭和 60(1985)年には、国立歴史民俗博物館による西八木海岸の発掘調査が行われますが、その時すでに直良は病床にありました。そして 11 月 2 日、明石市文化功労章を贈られた翌日、83 歳の生涯を閉じたのでした。



西八木海岸の「明石原人」腰骨発見地の看板

秦野とのかかわり

昭和 32(1957)年、郷土史家の梅澤英三が秦野市内に残されていたニホンオオカミの頭骨 3 点を東京科学博物館に持ち込み、動物学者の間で話題となりました。この資料の計測のため、直良は秦野の地を訪れました。

梅澤は翌年に秦野文化協会(後に秦野郷土文化会と改称)を立ち上げ、直良

は同会とのつながりで、たびたび秦野周辺に足を運ぶようになりました。

昭和 39(1964)年 5 月 15 日から 26 日には東中学校の校庭拡張工事に伴う発掘調査が行なわれており、この発掘調査の調査団長も引き受けています。

昭和 46(1971)年には古式を再現して行なわれた今泉地区の道祖神祭りを見学に訪れ、この時の様子を翌年、雑誌『アルプ』に「秦野の冬」と題して発表しました。

直良は秦野の地が気に入って、昭和 40(1965)年に音夫人が亡くなると墓所を今泉の太岳院に求めました。早稲田大学を退職した時、東京からの転居先として考えたこともあったそうです。

昭和 60(1985)年 11 月 2 日、83 歳の生涯を終えた直良の遺骨は同月 8 日、太岳院の墓所に納骨されました。戒名は「秋成院洪化清信居士」。ひととき大きな五輪塔です。



今泉太岳院の直良家墓所

おわりに

直良の学問、その真骨頂はナチュラルリストとしての観察力にあったのだと思います。それは恐らく机の上で学ぶというより、現場や原物で学んできたことによるのでしょう。自身でも幾多の動物を飼い、自然を観察しそれを緻密なペン画と生き生きとした文章で表現する。そうして生み出されたいくつもの著作は、今日も輝きを放っています。



ヤマネの挿画

直良が愛した秦野の地に私たちは日常を過ごしていますが、どれほど身の回りを観察し、考えているでしょうか。このささやかな展示が、もう一度私たちが住む地域に目を向けてゆくきっかけになれば幸いです。

* * *

今回の展示にあたり、杉山浩平氏から貴重な資料をお借りしました。この場を借りて御礼申し上げます。

なお、故人については敬称略とさせていただきます。

直良信夫－秦野に眠るナチュラルリスト
発行 令和7年5月24日
編集 はだの歴史博物館

〒259-1304 神奈川県秦野市堀山下 380-3
Tel. 0463-87-5542
FAX 0463-87-5794